大月の防災はどうなってるのか？

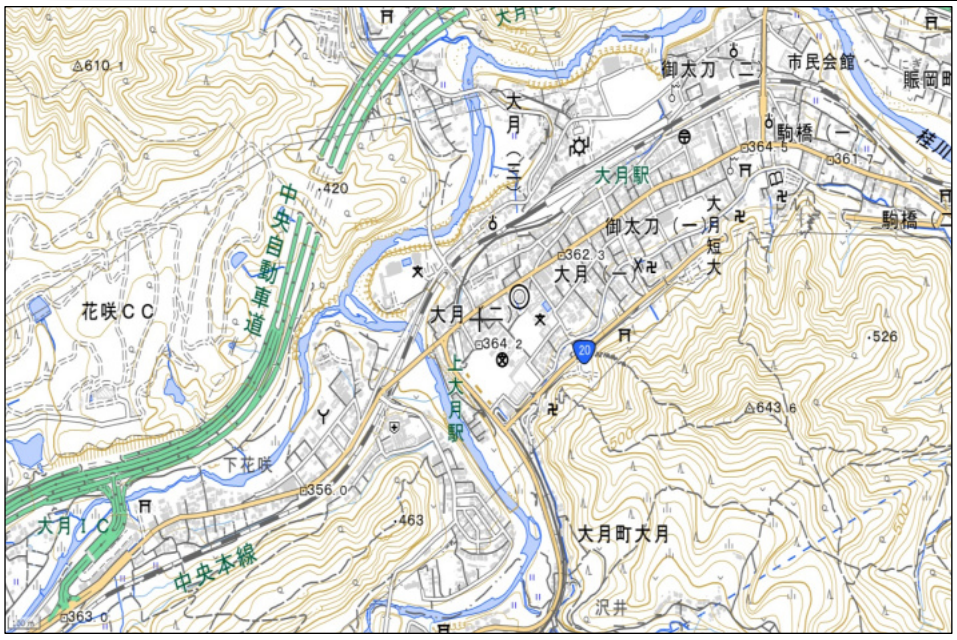
耐え忍ぶ秋の都留高特集号

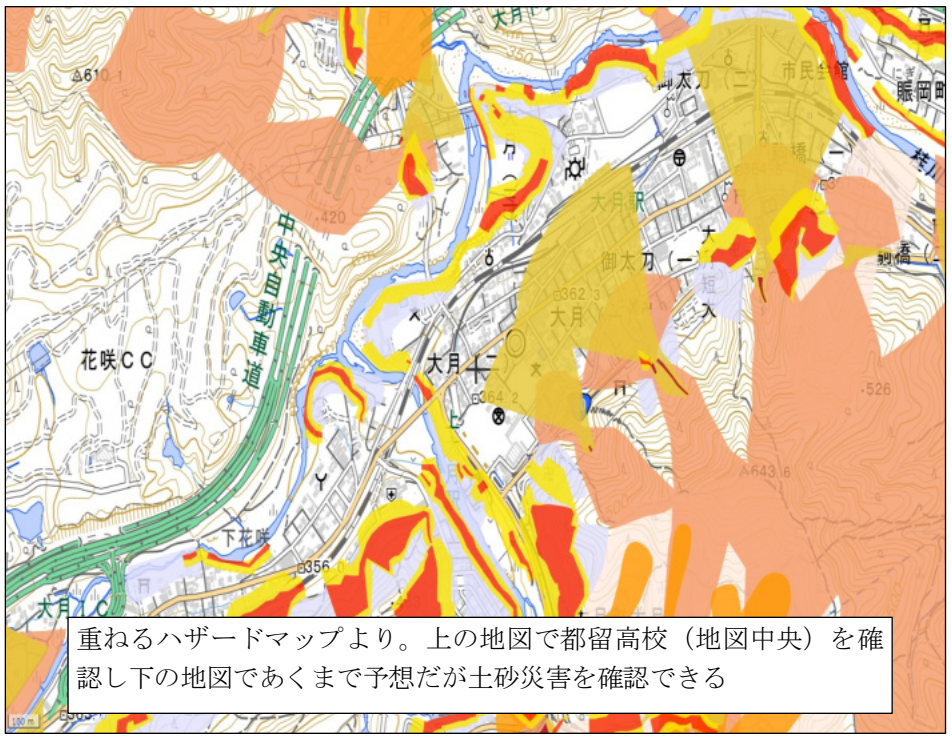
都留高ニュース

発行所
山梨県立
都留高等学校
大月市
大月２丁目11-20
編集
都留高新聞同好会

ハザードマップの確認を！

新型コロナウイルス感染症が急激に広がり、まん延防止等重点措置の対象地域に加えられた山梨県。加えて大雨による各地で起こった土砂災害など心配事が多かった夏休みも終わり、学校生活も再スタートしました。今号では、大月市の危険予測について、またコロナ禍の中でも行われた行事について紹介します。





重ねるハザードマップより。上の地図で都留高校（地図中央）を確認し下の地図であくまで予想だが土砂災害を確認できる

令和3年7月3日10時30分頃に静岡県熱海市伊豆山の逢初川で土石流が発生。熱海雨量観測所における降り始めからの総雨量は４００ミリメートル以上。記録的な大雨で盛り土が崩れ、大量の土砂が住宅や車を襲った。22人が死亡し、いまだ5人の行方がわかっていない。

この土砂災害から自分たちにできることは何か、また必要なことは何か考えていこうと思う。

気を付けるべき点は？

そこで地理の小俣秀雄先生に都留高校周辺のハザードマップを見てもらいお話を伺った。

もし土砂災害が起こり避難する際一番気をつけるべきことは何かと尋ねると、「土砂災害には地滑り、崖崩れ、土石流の三つがある。地滑りは広範囲でスピードがあまり速くないが、崖崩れや土石流はスピードが非常に速いため起きた時には逃げ遅れている可能性が高い。その前に自治体の警報に気づいてあらかじめ安全な場所へ避難しておくことが大切である。」と話した。さらに、このハザードマップから読み取れる一番大事なことは何かと尋ねると、「ハザードマップに書かれている範囲はもちろん危険であるし、書かれていないところも安全というわけではない。ハザードマップはある前提よりここは危険であるとか安全であると定めているため、前提とは違う規模の大きい災害が起きた時など安全は確保できない。自分の家のハザードマップを見た時、災害の範囲に入ってなかったとしても安心しないこと。あと河川の氾濫が考えられるときによく大きな河川について予想される。それ以外にも小さな川があってそういう小さい川の方が氾濫する可能性が高いので注意が必要である。」と話した。

最後に、今から自分たちができる対策は何かと尋ねると、「**自分の住んでいる場所が土砂災害の被害を受けるリスクがあるのかどうかあらかじめ把握しておくことが必要である。**」と話した。

災害の特徴を！

この話から自分の身を守るために早めの判断とハザードマップの見方、災害の特徴を知ることが必要だと思った。そのためにあらかじめ自分の住んでいる場所がどんな災害に巻き込まれる可能性があるのか、さらにどのくらいの規模かを知っておく必要がある。しかし、ハザードマップ上では大丈夫だとしても実際に災害が起こった時どうなるか分からない。その時その時のとっさの判断や行動が必要になってくるため家族と今一度確認し、災害に対しての意識を高めていけたらいいと思う。

自学進取

この夏もコロナウィルス感染症予防による自粛のため外にはあまり出られなかった。そのため、家でアニメをたくさん見た。そのうち清水茜著『はたらく細胞』（講談社）で生物を、原作：稲垣理一郎、作画：Boichi『Ｄｒ．ＳＴＯＮＥ』（集英社）で化学について学ばせてもらった。『はたらく細胞』はタイトル通り、とある「人」の体内で年中無休で働いている数十兆個もの細胞（主に免疫系の諸細胞が中心）を擬人化した物語である。『Ｄｒ．ＳＴＯＮＥ』は全人類が石化してしまい、文明以前に戻った環境の中、復活した主人公が化学の知識を生かして文明状態に戻っていく物語である。ともにかなり細かい知識が散りばめられ（自分にはそう思われ）勉強になる。一方、あｆろ著『ゆるキャン△』（芳文社）に続き、トネ・コーケン著『スーパーカブ』（角川出版）のアニメが北杜市の地域活性化に貢献しているようである。大月市を舞台としたアニメによる地域活性化にも引き続き期待したい。オリンピックの開会式の各国の看板には漫画の「吹き出し」が使われたのだから、漫画やアニメはすでに日本の象徴なのだろう。ではでは、世界史好きな私は今から、ギネス記録を２０１巻で更新したさいとうたかお著『ゴルゴ13』で国際情勢を学ぶとしよう。（顧）

取材・広告希望の方は新聞同好会（木内）まで

全国総合文化祭和歌山大会に参加して

２年ぶりに開催された全国高校総合文化祭。今年は和歌山県で感染症予防対策をしっかり行いながら開催されました。

第４５回全国高等学校　総合文化祭「紀の国わかやま総文２０２１」が和歌山県で開催された。昨年はＷｅｂ開催となったが、今年は万全の感染症対策を取りながら、日々の活動で培われた創造力を発揮していた。新聞部門では、和歌山県内各地を各グループごと取材し、新聞をつくる。

一日目は、交流会を行い、新聞の構成を話し合った。いきなり初対面の方達と新聞の構成を話し合いながら考えることは、我ながら絶望を感じていた。しかし、メンバーがとても優しく、各学校が培ってきた経験を活かしながら、良い新聞にできるよう計画を立てていった。

二日目は、各グループごと和歌山県内に取材を行う。和歌山県は、自然、歴史、産業、全てが豊かであり、食べ物もとても美味しい。将来、移住しようかな、と思ってしまうほどであった。私のグループでは、和歌山県の農家の方が持つこだわりを探ってきた。フルーツにかけるこだわり、農業家の現状、など実際に取材をしないと分からない事実を聞くことができた。私達がいつも食べているフルーツは、農業家の方が手間暇をかけて、ここまで運ばれてるのだと思うと、とても感謝の気持ちでいっぱいだ。なかでも印象に残ったのは、農業の六次産業化についてだ。和歌山県は地域資源を生かせる六次産業化を進めており、生産者が加工と流通、販売も行い、経営の多角化を図っているという。一次産業のみでは得られなかった収入や、商品に付加価値をつけて販売できるようになったり、雇用の増加につながったり、さらに地域の伝統や文化も守ることができる。ＪＡ紀の里ファーマーズマーケット　めっけもん広場の方は「六次産業化を進め、消費者と生産者をつなげる拠点にしていきたい。」と意気込みを見せていた。

三日目は、各個人が書いてきた記事を顧問の先生方に添削してもらったり、配置を見直したりと新聞づくりの最終段階に入った。つなぎ、腹切り、半五、など新聞業界用語がたくさん飛び交い、とても困惑してしまった。さらに最終日に私達に残された時間は、約３時間半。余裕だろう、と最初は考えていたが、徐々に時間が足りないことに気づき、残り時間が三十分になったとき、もはやそこは戦場と化していた。なんとか終了時間一分前に終わらせることができ、メンバーと喜んでハイタッチしたことを今でも覚えている。

あっという間に過ぎていった四日間。最初はどうなることかと思ったが、和歌山県の魅力に触れることができ、同年代の高校生と関われたことは一生の思い出となった。

会場の和歌山県開智高校

部説　感謝の気持ち

「まずは大会の開催と運営に協力してくれた人。テレビの前で応援してくれた人、全員に感謝したい。本当にありがとうございます。」と涙ながらに述べたのは山梨県出身のレスリング男子グレコローマン六十キロ級銀メダリストの文田健一郎さんだ。自身の試合結果よりも先に周囲への感謝を述べたのは文田さんだけではない。どの種目のどの選手もインタビューで「感謝」を口にしていたのが印象的なオリンピックだった。

二〇二〇年、一月。東京オリンピック開幕まで残り半年に迫るなか、突如発生したウイルスによって世界は変わっていく。新型コロナウイルスの世界的拡大に伴い、オリンピックは史上初の一年延期。会場には前回大会のような歓声は響かず、閑散としていた。全てがイレギュラーだったのはオリンピックだけではない。全国の芸術文化活動に取り組む高校生が集う、全国高等学校総合文化祭（総文祭）もその一つだ。総文祭はいわゆる「文化部のインターハイ」である。開催地の和歌山県に行き、全国の高校生と新聞を作るのを私自身も心待ちにしていた。そんな中で東京では新規感染者が五千人近くにもなり、山梨でも感染者は増加。総文祭が近づくにつれて全国に感染は拡大してく。

食で食べたお弁当には和歌山の名物がふんだんに使われており、とても美味しかった。ただ美味しいだけではなく、一つひとつの料理の説明が書いてあるお品書きがお弁当に入っていたのだ。私はここに「おもてなし」の心を感じた。お弁当からはわざわざお品書きを付けるほど、現地の人の「和歌山を知ってほしい、より楽しんでほしい。」という想いが伝わってきたのである。まさにお品書きにも書いてあったように「和歌山の魅力が大集合！和歌山がもっと好きになるお弁当。」だった。

東京オリンピックも総文祭もボランティアや大会関係者の方がいなければ開催はできなかっただろう。総文祭に参加して、私たちの活動は陰で働く人たちがいるから成り立っているのだと感じた。コロナ禍で先が見えない今だからこそ、陰で働く人へ感謝の想いを持って暮らせる社会になれば良いのではないか。

手作りで作られた感染症対策の防護壁。様々なところに地元の方々の感染症予防の対策が実施されていた。

ＳＡキャンプに参加して

７月26日からのＳＡキャンプで私たち１年５組は青木ヶ原樹海に行ってきました。

青木ヶ原は山梨県富士河口湖町・鳴沢村にまたがっている森で富士山の北西に位置します。山頂から眺めると風になびく様子が海原でうねる波のように見えることから「樹海」と名ずけられたそうです。また、国の天然記念物に指定されています。

樹海の散策では、ガイドさんに、樹海に住んでいる生き物、植物、樹海が抱える問題など、普段の生活では学べないことを多く教えて頂きました。その中でも特に印象的だったのは、樹海の歴史です。今から約１２００年前、西暦864年に起きた富士山の噴火で流れた溶岩の上にできた森です。溶岩流に覆われた大地は樹木は生えず、生物も生きていけない状態となります。そこに、雨や風により少しずつ表面が風化し、くぼ地に雨が溜まり微生物が生息できるようになり、植物が生息・生育できる環境が作られていったそうです。ある程度高木の樹海が生育できるようになるまで、２００年かかると言われており、この青木ヶ原樹海ほど広範囲に広がったのは約３００年前ほど前と言われています。自分の目で見た素晴らしい自然が長い年月をかけてできてきたと知った時は不思議な気持ちになり、更に、美しく見えました。こんなにも歴史のある自然を見れてとても嬉しかったです。みなさんも機会があれば是非行ってみてください。

青木ヶ原樹海＝７月２６日

１位となった３年３組の学級旗